

[原著論文]

沖縄県の小学校における観光基礎教育の授業モデル構築と 教材開発に関する研究

寺本 潔

要 約

小学校における観光をテーマとした授業と教材開発が沖縄県の公立小学校を舞台に行なわれた。既成の社会科単元を組み替えて実験的に実施された。加えて、筆者自身による出前授業と自作したカード教材の有効性も確認できた。観光の授業は自県のよさを子どもが見直すだけでなく、観光客が楽しむプログラムを立案したり、身近に存在する世界遺産を観光客の目で捉え直したりできる機会になる。子どもたち自身が「観光のまなざし」を理解し、自らも確かな観光者として成長できるきっかけとなる。

キーワード：沖縄県のよさ，観光単元，滞在プログラム，観光資源

1. はじめに

観光の動向から目が離せない。円安傾向の中、訪日外国人観光客の急増が顕著になり、本年度は1300万人にも達するだろう。国内観光においても団塊の世代をはじめ旅行熱は旺盛であり、登山や温泉、世界遺産、食、歴史をテーマとした観光が人気となっている。家族旅行も堅調に推移しアウトドアスポーツや祭り（イベント）、鉄道、工場などをめぐる個別の趣味に特化したスモールツーリズム（オルタナティブ・ツーリズム）も盛んになっている。いまや観光は人生を豊かに過ごす上で不可欠な経験であり、観光そのものが生きがいになっている人々も多く出現している。観光を単に娯楽の一つと見るのではなく、主体的に観光を自分の人生の愉しみ（趣味・嗜好・生きがい）として位置付け、視野を広げ物事を前向きに捉えることができる「自分づくりの時間」と捉え直す必要がある。旅行者側だけでなく、受け入れ側としても有能な地域人材を育成するためにも、着地型観光を指向できる「まちづくり人」を育成しなくては、今後の持続的な観光の発展は望めない。国民の誰しもが、観光で育まれる体験知や教養に対し、教育的な価値を見出し、観光が一定の人間形成の役割を担っていると認知したい。オルタナティブ・ツーリズムがいわゆる着地型観光を促進し、観光まちづくりと密接に関与し、受け

入れ側である住民自身の参加・協力による新たな観光資源の発掘にも寄与するようになってきた。つまり、住民自身による地域再発見という副産物も生じるようになりつつある。

こうした観光が持つ基礎的な教育力を公教育で培うために、どのような授業モデルが構築できるのか、観光立県で有数の沖縄県の公立小学校を舞台に、具体的な教材開発を通して検討することが本研究の目的である。教科としては観光現象を内容として扱ってきた社会科が密接に関係しているものの、これまで教材開発はほとんど蓄積されてこなかった。

先行研究としても月刊『地理』が2006年に特集「観光教育がおもしろい」を組み、4人の執筆者が寄稿しているものの、高等学校や大学の観光教育、英国の教科書記述の紹介にとどまり、小学校教育の点からは実践的な内容ではない。研究論文としては唯一、佐藤（2013）が学会誌に提出され、小学校第5学年産業学習「観光産業」を扱ってはいるものの、教材面や指導法の面で未だ十分ではない。これまで社会科が対象とする観光に関係する社会現象や社会的物事もたらず意味の追究論文は、観光開発による地域の変容や産業としての観光、観光資源である国宝や世界遺産の分布や価値、交通網の整備、移民や出稼ぎなどを内容とするものが多く、観光現象そのものの解説や理解が主であった。

しかし、旅行する側（ゲスト）に立つにせよ、観光客を受け入れる側（ホスト）に立つにせよ、観光という現象が自己の成長に役立つ機能を持っていることは疑いない。授業モデルの構築の基軸に据える視点では、観光内容を子ども自身の問題解決的な学習を通して理解する過程で、社会生活を営む一員としての自覚を高め、国際社会に生きる日本人としての資質形成につながるように促したい。本稿は、寺本が研究代表として申請した平成26年度玉川大学学部間共同研究「小学校における観光基礎教育の授業モデル構築に関する研究—沖縄県を事例にして—」（寺本ほか中嶋真美・中村哲・曾山毅・小林亮で構成）の中間報告である。この中で寺本が担った授業モデルの構築を中心に観光基礎教育の必要性を論じてみたい。

2. 沖縄県における観光基礎教育の現状

観光による収入が県財政の3割を占める沖縄県は、観光立県と呼べる。産業構成を見ても製造業や農林水産業の比重は低く、歴史的に見ても復帰後、順調に成長してきた産業は観光業である。また、観光教育を専門とする学部教育（名桜大学や琉球大学）の発足も早く、実業高校や専門学校においても観光業への就業を目指す観光教育が行われてきた。県のリーディング産業としての認識も共有されており、観光人材育成の講座も活発に開かれている。そうした中で小学校段階から公教育の分野で注目できる試みは、小学校社会科を活用の中心に据えた学校教育用副読本『めんそーれ観光学習教材』（沖縄県コンベンションビューロー制作）の刊行があげられる。この冊子は、B5判全47頁（オールカラー）の装丁で次のような章で構成されている。カッコ内は主な内容をキーワードで示した。

第一章 「観光」ってなんだろう？（観光旅行の意義、世界と日本の観光地、平和へのパスポー

ト、世界ウチナーンチュ大会)

第二章 沖縄にはたくさんの方が来る（観光客の推移、リピーターの増加、航空路線、観光宣言）

第三章 沖縄観光の魅力（観光客の活動、県の自然・歴史・文化・祭り・イベント・料理）

第四章 沖縄の観光産業と働く人たち（沖縄経済と観光産業、各種の観光の仕事、免税店）

第五章 私たちと観光（マナー、ホスピタリティ、防災の心得）

この冊子は県内の全4年生児童に無料配布されており、毎年更新されている。自県のリーディング産業である観光への理解と人材育成を意図したバランスのよい内容に仕上がっており、一層の利活用が期待される¹⁾。

3. 第4学年児童に試みた観光の授業

(1) 児童による観光地滞在プログラムの作成

授業の大きなねらいは、「観光を通じた沖縄県のよさの見直しと自県に対する愛着と誇りを形成するために、自県の資源を見直し、魅力的な自分なりの滞在プログラムを立案することで言語力や問題解決の力を身に付けることができる」ことである。観光は最も地域の持続発展性に寄与しながら雇用を生み出す有力な手段であり、観光振興によって多くのメリットが生まれる。列記すれば、

- ・県外から2泊以上の期間を使って沖縄県に来てくれる。
- ・交通を使って来て滞在してくれる。その際、飲食や様々な体験を通して消費してくれる。
- ・県民と観光を介して触れ合ってくれる。
- ・県民は観光客からの評価によって自県のよさや価値を再認識する機会を持てる。
- ・海外からの訪問客の場合、異文化交流・相互理解の機会になる。などが挙げられよう。

さらに、自分たちが立案する滞在プログラムを通して観光客に何を提供したいのか、を考えると他者の視点に立った問題解決能力の育成に関わる。自県の観光振興について自分も関与したいと考えることでのステークホルダーにもなれる。ステークホルダーとは、活動の意思決定に関与することであり、観光業界の人間だけでなく、沖縄県に住む子どもたちも観光振興に関与でき、観光振興から得られる税収や収入から恩恵を受けていることを認識しておく必要がある。

ところで、新しい滞在プログラムの立案は次のステップを通して筆者によって作成された。ステップ1：地域資源の洗い出しと観光資源化⇒「自分の住む町には、旅行者に対して特に提供できる観光資源はない」「観光客は首里城やちゅらうみ水族館に行くに決まっている」との児童生徒の思い込みをなくすためにも「洗い出し」作業は必要である。洗い出しには次の6つの窓口を設ける。（ ）内は既に観光資源化・観光地化されている例であるが、まだ観光

資源化されていない対象はないか、ワークショップ形式で立案してみる。

6つの窓口

- ・自然・景観（サンゴ礁景観，ヤンバルの原生林，野生動物）
- ・食（チャンプルー，琉球料理，沖縄そば，アセロラ）
- ・歴史（グスク，琉球王朝，沖縄戦，本土復帰）
- ・生活・文化（冠婚葬祭，緋やびんがた，やちむん，結マール，ウチナー口）
- ・体験（ダイビング，サイクリング，カヌー，カチャーシー，琉球舞踊，ものづくり）
- ・施設（ちゅうらみ水族館，リゾートホテル群，アメリカ村，基地と柵，コザの音楽施設）

ステップ2：次に，地域資源の選択と観光行動を示す「動詞」との組み合わせを指示した。具体的な観光地でどのような楽しみ方を用意できるか。観光地+動詞=新しい滞在プログラムという方式をなげかけ，グループで考え合うように促した。動詞は，絵入りでカードで描き，計26種案出した（図1）。動詞の例として「風景をながめる」「貝殻を採る」「写真に撮る」「自然の音を聞く」「ヤンバルの森のにおいを嗅ぐ」「マラソンに挑戦する」「小物を作る」「土地のおばあと話す」「イノアの浅瀬を泳ぐ」「トレイルを歩く」「ハンモックで寝る」「漫才を聞いて笑う」「食べる」「料理する」「琉球古民家でそばを食べる」「泡盛を飲む」「御獄をめぐる」「紅芋タルトを買う」「びんがたの絵を描く」「琉球舞踊を演じる」「うちなー口をまねる」などがあげられる。



図 鳥のキャラクターを用い，絵入りで観光客の楽しみ方を例示した。

(2) 指導案

以下に実際に行った授業の指導案を示したい。

第4学年観光授業指導案

授業者 寺本 潔

本時のねらい：沖縄県は観光で人気No. 1であることを知り、その理由を考え合いながら、沖縄観光がどんな魅力に富んでいるか、観光客は沖縄に何を楽しみに来沖しているのかを考え、自分たちにも新しい滞在プログラムを立案できることを知ることで、観光業や観光の意味について理解を深める。

◆1時間目

	学習活動	指導上の留意点
導入	1 地図帳を開いて47都道府県の中で観光人気No. 1の都道府県はどこか予想する。 ・東京が1位と思う。 ・北海道ではないか ・ひょっとして沖縄県？	・予想した都道府県名を出した後、意見の根拠となる自分の考えを引き出す。 ・総合1位である資料を貼る。
展開	2 沖縄県が総合で1位の人気であることを知り、その理由を考える。 ・海や空が綺麗だから？ ・水族館や首里城に来ている ・結婚式で来ているのでは ・保養に来ている？	・『めんそーれー観光学習教材』の該当ページを開かせる。おおよその掲載ページを示してその中で探すように促す。 ・隣の人と話し合っ探してもいい。 ・各視点ごとにグループから出てきた意見を大まかに教師が整理する。
まとめ	3 観光客はリピーターが8割を占め、滞在中、どんな目的で観光するのかを考える。 4 6つの観光資源の視点をヒントに沖縄県が人気No1である理由をグループで考える。その視点が決め手？ 5 6つの視点の内、どれが最も重要なのか自分の班の考えを紹介する。	・『めんそーれー観光学習教材』p16に掲載のグラフに着目するように促し、自分たちの予想と照らし合わせるよう促す。 ・6つの視点を書いたカードを黒板に貼り、児童には班に1枚ワークシートを配布し記入させる。 ・6つの観光資源を分類する視点の内、どの視点が最も沖縄県にとって重要かを絞り込ませる。

◆2時間目

	学習活動	指導上の留意点
導入	1 地図帳に掲載の沖縄本島の拡大図を使い、沖縄本島で県外から訪れた観光客が楽しむ新しい観光の滞在プログラムを作る。	・沖縄本島にある主な観光地の名前を列記する。 ・『めんそーれー観光学習教材』の該当ページを開かせる。おおよその掲載ページを示してその中で見つけるように促す。
展開	2 観光地+動詞の組み合わせで楽しみ方を考え、ノートに各自3つ書き出す。 3 班で自分の考えを紹介し合う。 4 班の世話役の子どもが一押し楽しみ方を二案選択する。 5 班の代表者が黒板の前に出てきて案を黒板に書き出す。	・隣の人と話し合っ探してもいい。 ・最低、3案考えるように勧める。 ・友だちのアイデアを喜んで聞くためにも相づちと感嘆の声をあげるように勧める。 ・楽しく話し合いながら決めていく。
まとめ	6 皆で考えたアイデアの感想を述べ合う。	・班ごとの記入欄を板書で準備する。 ・実現できそうなアイデアを褒める。

子どもたちは、沖縄県が観光で9年間連続で人気No. 1である事実に驚き、どうしてそんな魅力があるのか、問いを持って追究していった。観光の魅力を6つの楽しみ（視点）から捉え



写真1 沖縄を訪れる観光客の楽しみを6つに分類して解説した筆者の板書



写真2 沖縄県を訪れる観光客の楽しみについて考えるように促している筆者

ることの有効性を解説した。その後で、リピーターが大半であることと滞在中の観光客の楽しみが何であるかを副読本から読取っていた。2時間目は、いよいよ今回、作製した絵カードの使用による新しい滞在プログラムの立案である。授業では、カードを机の上に並べた瞬間から、食い入るように没頭していった。自分なりの新しい楽しみを示すフレーズが案出できた子どもは嬉しそうであった。

班ごとで案出できた滞在プログラムは、一例を示せば「沖縄市でやっている全とうエイサーにさんかして、終わったあと古民家でそばをたべてくつろぐ。」というように極めてローカルで内容のある知恵が引き出せた。参観しておられた地元の教員もこの手法には強い関心を持って頂いた。児童作文であるが、その時の授業を受けた感想が綴られている。



写真3 滞在プログラムを考え出すヒントとしてカードを前に考え合う子ども

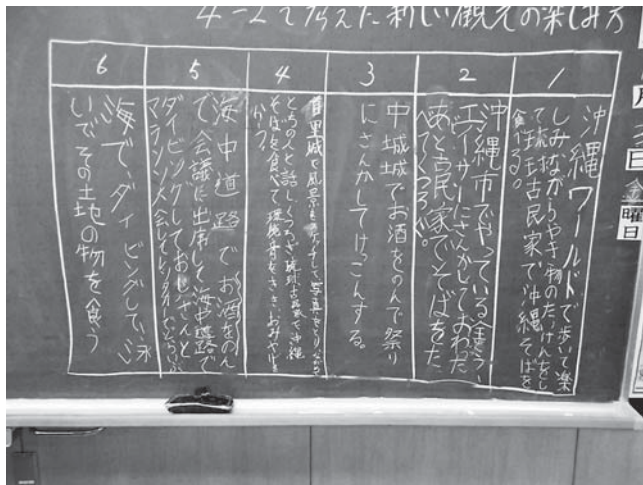


写真4 班ごとに考え出された滞在プログラム

「観光のじゅぎょうをうけて

中城南小学校4年 平良結菜さんの作文

私は、観光のじゅぎょうをうけて思った事は、今までずっとくらししてきた沖縄にはこんなにすてきな物がたくさんあったんだと思いました。五時間目は、沖縄が観光で1位だったのでとてもうれしかったです。そして、なぜ沖縄が観光で1位だったのかをみんなで考えました。わたしは、きれいな海とめずらしい生き物を見にきたり、いろんな楽しいイベントを見にくるから1位だと思いました。六時間目は、動詞の書かれたカードなどで文章を作りました。みんなと話し合いながらきめたのでとっても楽しかったです。またやりたいと思いました。オリジナルで作ったカードもかわいかったです。今日、このじゅぎょうをうけて、えがおもふえたし、とてもたのしく学習できました。」

4. 子どもによる世界遺産、中城城の見学・調査とコラージュづくり

次に、1ヶ月を経た11月に計6時間の出前授業を実施させて頂いた。世界遺産、中城城を観光資源として見直し、観光客向けのコラージュ作品を作ろうとよびかけた授業であった。その時の見学学習に先立つ、視点を学ぶ授業の指導案を以下に掲載したい。

第4学年観光授業指導案（11月12日2限・3限）

授業者 寺本 潔

●本時の目標

世界遺産中城城の価値に気付き、これまで先人が残してくれた地域の遺産として自分たちも継承していきたいと願い、そのためにも実際に見学し石垣の組み方や美しさを撮影しようとする。

●本時の展開

	学習内容	指導上の留意点
導入	1 中城村が編纂した副読本『世界遺産のあるわたしたちの中城城』p2を通読し「いさん」の言葉の意味について国語辞典で調べる。	・「いさん」という言葉には「死後に残した財産」「前代の人が残した業績」の二つの意味があることを知らせ、沖縄のグスクは日本では12番目の平成12年に指定されたことを補足する。
展開	2 今から600年ほど前に護佐丸が造った城であることを知り、600年の時間の長さを歴史尺で理解する。	・600年もの時間の長さを紙で作った尺で視覚的に把握させ、長い時間が中城城には積み重なっていることに気付かせる。
	3 副読本p7に掲載の「整備・修復の歩み」の中に「ばっさい」や「とりこわし」の言葉が多く書かれているのはどうしてか、理由を考える。	・大事に保存しなければならない中城城なのに「ばっさい」「とりこわし」が多いのはどうしてなのか、を問い掛ける。
まとめ	4 「世界遺産」の意味を改めて考える。	・「別の言葉で言えば」と切り出し、世界中に大切な「いさん」として認められ、中城村の宝であるとの表現を引き出す。
	5 11月19日に実際にカメラを持って取材することを知り、取材の視点について寺本のスライドで学ぶ。	・石垣の組み方やその曲線美が空・緑とのコントラストで美しいことを補足する。

筆者による授業を介して子どもたちの反応は、中城城に対する見方を大きく変えるものになった。600年もの間、残ってきた大事なものであり、長く伝わってきたものであるという遺産の意味が子どもたちに理解できた。本土の城にはないカーブしている美しい石垣が残ってきたから大切にしたいという自覚が生じつつあった。実際の見学・調査では使い切りカメラを持参して撮影することを伝え、調査のポイントを以下のように筆者は示した。

◆世界いさん 中城城をちょうさしよう 3つのポイント

① かんじる

○600年も前につくられた琉球のお城をいままでのこしてくれたむかしの人たちにかんしゃしよう。

○たてもものはないけれど、石がきはのこっているよ。その美しさは日本でいちばん！ どこが美しいとかんじますか？

○こんなに美しいお城をつくったごさ丸さんの思いは何だったのだろうか？

② きく

○ガイドのおじさんは、お城の何をせつめいしてくれるのかなあ？ メモしよう。

○ガイドのおじさんは、県外からきた観光客でなく、中城村に住むみなさんにもせつめいしてくれるのはどうしてだろう？

③ シャしんをとる

○美しい角度からシャしんをとろう。お城と空のバランスやしょくぶつがきれいにはえているばしょをさがしてシャッターをおすといいよ。

○石がきのつみ方や石のけずり方がわかるシャしんをとろう。

○たいせつにお城をまもっているしょうこをシャしんにとろう。

○すこしだけ自分のすがたもシャしんに入れておこう。

その後、いよいよ11月19日に4年生63名を引率し中城城見学学習をバスを貸切り、実施した。地元NHKの取材も受け、当日のニュースでも取り上げられた。子どもたちは改めて世界遺産である中城城の価値に気付き、翌日のコラージュ作品を意欲的に完成させていった（写真5～8）。



写真5 中城城入口において、ガイドさんの解説に耳を傾ける児童（寺本撮影）



写真6 石垣の積み方を撮影している児童（寺本撮影）

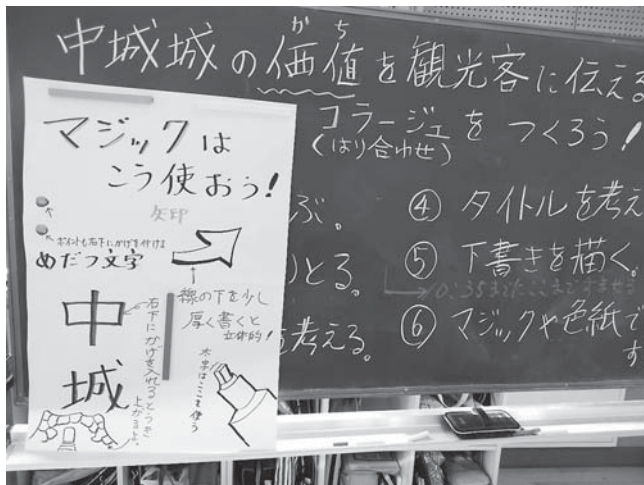


写真7 コラージュ作品の描き方を指導した寺本による板書

5. おわりに

小学校における観光基礎教育を開始する十分な意義が、本研究によって明らかとなった。観光客の立場に視点を移して自分の地域を見直し、新たな観光プログラムや資源を見出そうとする意識が芽生えてきた。グラフや資料の読取りを始め、語彙を駆使して文章をつくる力や現地を取材する能力など多岐にわたる学習技能を身に付けることに成功した。観光という題材は、楽しみや自慢、誇りなど学習にポジティブな意識を持ちつつ展開できる長所がある。さらに、観光客数の推移や他県と比べた自県の人気度を扱いつつ、自己の視野も広がる効果が見られる。基礎的な自県や国土に関する地理的知識も保有できる。つまり、観光は、学力形成としても有



写真8 児童が作成したコラージュ作品の1例

効なテーマなのである。

謝辞

本研究の実施に対し合計16時間にも及ぶ出前授業を受け入れて頂いた沖縄県中城村中城南小学校の大城盛文校長ほか教頭先生や4年生担任の先生方、山内かおり研究主任には深く感謝申し上げたい。中城村指導主事の伊波正明氏には授業を参観して頂いた。また、沖縄コンベンションビューローの森、宮両氏には様々な便宜をはかって頂いた。以上の方々に記して、お礼申しあげたい。

注

- 1) 沖縄県内の公立小学校200校に対し、昨年6月に副読本の使用状況に関するアンケート調査を行った結果、有効回答54校の内、32%の小学校で「ほとんど使用していない。」との回答を得ている。

参考文献

- ジョン・アーリ著 加太宏邦訳 (1998)：『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局，289ページ。
- 糸戸学 (2006)：観光教育の拡大と多様性を考える—観光教育とは何か、『地理』第51巻，pp28～38。このほか3本の論考が掲載されている。
- 小和田哲男ほか (2010)：『図説 日本100名城の歩き方』河出書房新社，127ページ。
- 寺本潔 (2010)：「小学校社会科における観光単元の導入に関する一考察」、『論叢』（玉川大学教育学部紀要）pp27～42。
- 寺本潔 (2011)：『思考力が育つ地図&地球儀の活用』教育出版，133ページ。
- 佐藤克士 (2013)：観光研究の成果を組み込んだ「社会科観光」の授業開発とその評価、『社会科教育

研究』 118号, pp1~14.

寺本潔・吉田和義編著 (2015) : 『伝え合う力が育つ社会科授業』 教育出版, 134ページ。

Research on the Practice of Model Class of the Tourist Foundation Education and the Development of a Subject in Elementary School, Okinawa Prefecture

Kiyoshi TERAMOTO

Abstract

The class which made sightseeing theme in elementary school, and Tourism in Social Studies were done.

An existing social studies unit was rearranged and carried out experimentally. The validity of the card subject which did a delivery service class by Teramoto himself and its own work could be confirmed, too.

Children themselves understand “the point of view of the sightseeing”, and it will be the start which can grow as reliable, a tourist person personally, too.

- 1 It is connected with making child's scholarship that it learns about 1 sightseeing.
- 2 Pride is born by finding tourist resources by oneself.
- 3 We must develop some subject about the sightseeing more.

Keywords: the strong point of Okinawa, tourist unit, stay program, resources